

次回企画展予告

第20回企画展
市制100周年記念 特別企画展

「シカゴ美術館—中国美術名品展」

会期：1989年2月11日(土・祝)～3月21日(火・祝)
主催：シカゴ美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、
朝日新聞社

■「シカゴ美術館—中国美術名品展」

シカゴ美術館はシカゴ市のはば中心部にあるグランド公園の中のミシガン通りにあり、ミシガン湖畔に位置している。このシカゴ美術館の正式名称はシカゴ芸術学院(The Art Institute of Chicago)といい、美術館、美術学校、演劇学校からなる総合芸術センターとして機能している。1989年には創立110周年を迎える伝統ある美術館で、米国の代表的な美術館の一つにあげられている。1893年開催のコロンビア万国博覧会の国際会議場としてつかわれたイタリア・ルスサンス様式の建物が現在の美術館である。その後、増改築を繰り返し、数多くのコレクターの寄贈や市民の基金によって、収蔵品は現在では3万5千点にも及んでいる。その中でもスラの代表作「ラ・グラント・ジャット島の日曜日の午後」を含む19世紀、20世紀のフランス絵画でシカゴ美術館の名は世界的に有名である。

一方、東洋美術にも充実した内容を誇っている。1921年には早くも東洋部が設置され、バッキンガムコレクション、ラッセル・タイソンコレクション、ソンネンシャインコレクションなどが寄贈され、シカゴ美術館の東洋美術3大コレクションを構成している。そのうち、バッキンガムコレクションは日本の浮世絵、中国の青銅器、陶磁器などからなり、日本でも既にこのうち浮世絵コレクションの展示會が開かれた。

今回開催される「中国美術名品展」は中国の青銅器、陶磁器、仏教美術、玉器それに朝鮮の陶磁器からなる優品105点を展示するものである。青銅器はバッキンガムコレクションから、中国、朝鮮の陶磁器は主にラッセル・タイソンコレクションから選ばれた。特に唐三彩の馬はシカゴ美術館に常設展示されたため門外不出のもので、タイソン馬として親しまれている著名な作品である。そのほか宋青白磁水禽形香炉、高麗青磁水禽形水注など極め付きの逸品も含まれている。ソンネンシャインコレクションは中国古代の玉器として世界有数のコレクションを誇っている。

1988年6月下旬に、竹下尚肖がシカゴを訪れた際、東洋部ギャラリーの改装について日本政府が資金援助を約束したことで話題となつたが日本両国の政府、企業の寄付により、1991年に完成が予定されている東洋部ギャラリーは全米第一の展示面積となる。今回の日本における展覧会は東洋部ギャラリーが改装中であるため初めて可能となった企画であり、105点の出品物はいずれも東洋部ギャラリーの展示の中枢をなす作品ばかりである。

なお、この展覧会は下記の二会場でも開催されます。

1. 会期 1989年4月1日～5月7日
会場 MOA美術館(熱海)
2. 会期 1989年5月16日～6月18日
会場 出光美術館(東京)



お知らせ

第12回講演会を下記の如く開催致します。

日時：1989年2月14日(火)

午後1時半～午後3時半

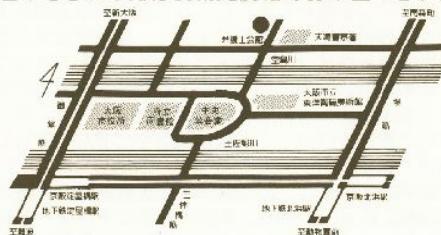
場所：大阪弁護士会館 6階大会議室

講師：シカゴ美術館 東洋美術部長

文学博士 番 豊 氏

演題：「シカゴ美術館所蔵の中国陶磁について」(仮称)

*講演会の受付で会員証を提示していただきますので、会員証はお忘れなく御持参下さい。講演会当日の継続のお申込みをされる方は美術館受付でお申出下さい。



編集後記

大阪市制100周年記念当館特製カレンダーは、中国の青花(染付)をテーマにしています。白磁に描かれたコバルトルバーの鮮やかな文様をどうぞお楽しみ下さい。

友の会事務担当者が小山和子から土田あやかに代りました。岩々しいフレッシュな感覚を活かして意欲的に仕事に取り組んでいますので、今後共よろしくお願い致します。
(O)

1988年12月15日発行(年4回)Vol.4-3(通巻14号)

大阪市立東洋陶磁美術館 友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.14

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL. 06(223)0055

美術館の舞台裏 (11)

今回は、展示におけるGRADING(等級分け)についてお話ししましょう。前回のGROUPINGでは、分類の基準は、そのものの持つ外見上の特徴に目を向けたものでした。すなわち、製作年代や国、技法などの大分類のうち、形や大小、釉色や文様、あるいは用途などの共通項をとらえて、さらに細かくグループ化していました。これに対してグレイティングとは、そのものの質的水準に焦点を合わせて分類していくものです。ここで、美術品の質的水準を決するものは何か、という大きな問題に行きあたります。これについては別の機会にゆずることとして、ここでは簡単にA、B、Cなどの質のクラスを仮定して話を進めましょう。

展覧会を開催するとき、一つの特定のテーマを設定して、それを表現するのに最も適当な資料(美術展では主に美術品)を選定して出品リストを作成します。Aクラスのものは、数量的に限られますから、B、Cクラスのものを含めることも止め得ないことです。

テーマを効果的に展開するためには、展示に工夫を加えなければなりません。床の間に当るメインケースにAクラスのものを並べて会場の雰囲気を引き締めることも、その一つです。またAクラス1点、Bクラス1点、Cクラス2点を並べる時、A-(C、B、C)、あるいは(B)-A-(C、C)というように、格の高いものを少し離すとか、順序を変るとか、敷板に一段高く載せるとか、配列にアクセントをつけるのもその一つです。

展示配列には、一定のリズム感を持たせることが必要だと考えます。静かな導入部から、語りの部分がしばらく続き、やがてクライマックスを迎えて静かな余韻とともに幕を閉じる、というような展開ができれば素晴らしいことです。そのためにはグレイティングによる分類をしっかり行い、展示配列にメリハリをつけることが求められるのです。

グレイティングとは、企画にたずさわる者にとって、その知識と経験と感性の総力を結集して、新しい評価基準のもとに価値体系を形づくる、その基礎ともなる重要な作業なのです。

1988年12月

大阪市立東洋陶磁美術館
館長 伊藤郁太郎

◆第11回講演会要旨◆

「李朝陶磁における秋草文」

日時：昭和63年11月5日(土)

午後 1時半～3時半

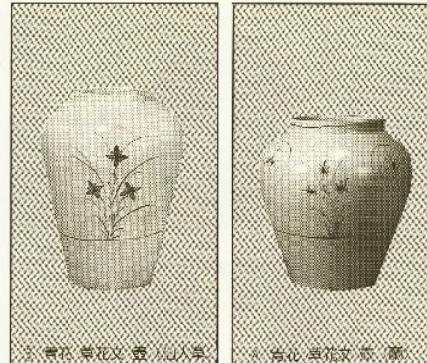
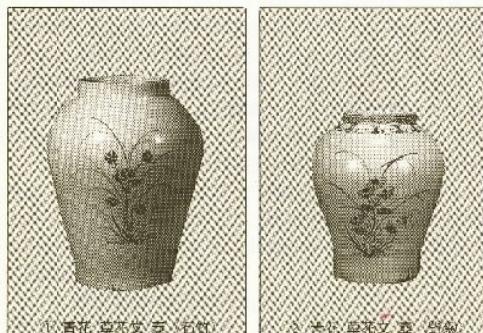
会場：中之島中央公会堂 3階中集会室

講師：美術史家 源 豊宗 氏

朝鮮の美術としては、先ず高句麗時代の古墳の壁画が極めて重要な存在として注意される。ついで統一時代の新羅の仏教美術、そして高麗時代に発達した陶磁器が数えられるが、しかし李朝における白磁はある意味では朝鮮芸術を代表するものといつてもよいと思います。じつは陶磁器の材質のひそやかな佗びしさ清潔なつめたさは、一口に云つて朝鮮芸術の根源的な世界観としてのメランコリーに外ならないと思います。その李朝の白磁にはむろん色々なデザインが施されていますが、中でもいわゆる秋草手として世の珍重する所の、白磁の壺や徳利の表に染つけで描かれた草花文は、何か強く人の心を惹くものをもっています。

この秋草手といふものの文様の素材は、ただ四種類で、その一是石竹、日本ならば撫子という所、第二は野菊、第三は仙人草、第四は普通蘭ともいわれているが、必ずしも蘭とも云えない、何かの花でしょう。これらの植物は、第四は判らないが何れも薬草であることは興味があります。恐らくその薬草のイメージが寿福への龕に満ちるのだと思われます。それは何れの民族にも見られる現象で、中国の陶磁の文様によく見る柘榴や桃の意匠はまさにそれです。柘榴は豊饒多産、桃は不老長寿です。この李朝陶磁の中には「家和事成」という文字を書いたものもあります。家庭が平和で願い事が成就するようにという願望です。この秋草手の意匠を見ると、その花の数は二か五、もしくは七、即ち七五三というこれも瑞祥性の数です。日本でも同じですが、このような日常用器に福寿思想が色こく表現されている、朝鮮民族の作らしい人生觀を思わせるのです。

秋草を愛好するのは日本民族の著しい性格と云つてよいと思ひます。日本人の秋草は一面には過ぎゆく「時」への愛惜の情



感、いわば日本民族独特の時間的世界観が、その根底にあるのですがそれと共に秋草のたおやかな曲線性の感覺、萩、おみなえし、葛、尾花など、そしてその可憐な、明るい色調、その優雅な風情への愛好が主となっているのだと思います。それが日本の美意識の根底にある「あわれ」に外ならないのです。このあわれはいわゆる哀れではなく、対象への愛しみ、人間的共感、云いかえれば対象へのヒューマニスティックな感情移入なのです。

李朝陶磁の秋草文はたしかに日本の秋草文と同じく左右に柔らかに傾く曲線の構成です。しかし李朝白磁の秋草手とはいふものの必ずしもそれは秋草ではないのです。仙人草は真夏の花です。しかしそれを秋草手と呼ぶのは、むしろ日本人の秋草愛好の視覚がそれを秋草と感じたことに非常に興味があります。李朝の陶磁にとっても、それらに施された文様の点からいっても多様です。李朝の盛時はちょうど中国では明の時代ですが、この明の時代は中国陶磁史においてそのデザインの著しい変化が現われている時でした。というのは此の時代にオリエントのアラブ人の往来が頻繁となり、すでに元の時代にコバルト釉の原料である「回青」即ち回教世界から賣られた青の輸入によっていわゆる染付が始まり、更にアラブ民族特有の繊密なアラベスクのデザインが伝わりました。かつての様な国際性を反映して華やかな赤絵の如きが発生しました。その明文化の影響下にあった李朝はその様な感覚的デザインも盛にとり入れているのです。李朝陶磁の意匠には、こうした賑やかな絵画的文様やアラベスク風の器面を埋めた意匠も行われています。然し朝鮮本来の民族的意匠はやはりこの秋草的なつましい寂しいデザインが本領であると思います。

この秋草手的な文様は、此の東洋陶磁美術館蔵の青磁の四角の平らな陶板に象嵌した蒲柳水禽図の非常にデリケートな線で表現されたひっそりした朝鮮の民族的感覺に、その祖型をもつ様に思われます。此の陶板は十二世紀中葉と考えられているようです。その意味では李朝白磁のいわゆる秋草手は最も朝鮮的であり民族的だといえるでしょう。

この秋草手文様の特徴を日本の秋草文の様式と対比して考えてみると、第一に文様の構成が、李朝のではただ一種の素材、石竹なら石竹だけが描かれていること、しかもそれが一茎か二茎だけが描かれて寂しい構成であるのに対し、日本の秋草文はそれが時絵であれ、和鏡であれ幾種類もの秋草が、萩、おみなえし、藤袴というように組合されて描かれている。それ故それ

のです。第二には李朝のデザインは何れも全く一様の圓形で、尤も判で押したような機械的な固さはないが、それ所でない、秋草手と呼ばれる程の秋草的ななよやかな曲線を主調とする造形であることはたしかです。しかし日本の秋草文は全く自由な絵画的表現で、十種類並べれば十種ともそれぞれ別々の圖柄であります。日本の工芸史における最初の秋草文様というべき平政子寄進という鶴岡八幡宮の唐絵螺鈿の硯箱に描かれた生いしがる籬の菊に雀の群れ飛んでいる意匠は全く絵画的であります。上芸鳥匠の絵画性は日本美術史の著しい特色であります。第三にはこの秋草手の文様は常に器皿の正面にほとんど左右対称的構図において描かれています。しかし円い様な器は決った正面はないが、作家は正面を設定するから、円形といえども正面が存在し得るのです。その様な正面の中央に正しくそれは左右対称的に、例えば五輪の右竹ならば、中央の茎の頂点に一輪、他の四輪は茎の左右に行儀よく並べられています。まことに律儀的な感覚であります。これに対して日本の文様はほとんど例外なしに、画面の左右の何れかに片寄せで描く。それは文様のみでなく一般的な絵画がそれであります。私はこれを日本絵画構図の偏倚性と称んでいます。日本人の感覚はシムメトリーや平衡の良さを欲しないのです。本質的に人間的自由性を志向しているからです。

李朝陶磁のさびしげなやさしさは、日本人の佗びを愛する精神と共通するものがあるのです。しかし日本人の佗びは風雅の精神による芸術的感覚であります。それに対して朝鮮民族の佗びはその本質的なバシミスティックな世界観によるといつてよいと思います。そこに朝鮮芸術のメランコリーがあるのです。私はかって慶州の石窟庵に登る山路に一人の老人が吹いていた笛の音色の名状しがたいわびしい韻を今も忘れません。それは朝鮮渡来の飛鳥仏、たとえば京都太秦広隆寺の俗に泣き弥勒といわれる仏像、殊に天平六年(734)造立の興福寺の十大弟子と八部衆のその哀愁をおびた表情は、恐らく半島から渡来の仏師の手に成ったものと考えられます。桃山時代の茶人達が珍重した井戸とか、伊羅保などといいわゆる高麗茶碗は朝鮮庶民の日常雑器であった。それは日本のわびが共感した朝鮮民族の内奥にひそむメランコリーであったのです。朝鮮芸術の再認識が大正末期に柳宗悦によって現われています。大正時代は近代におけるロマンチズムの高潮した時代であります。このロマンチズムは多分にメランコリズムを帯びています。「花の咲かない枯すさ」のような歌謡曲が風靡した時代であったのです。この時代に朝鮮の民族的藝術への関心が高まったということは興味があります。秋草手の李朝陶磁への芸術的認識もかくて始まったのではないでしょうか。

(今回は源先生の御好意により講演内容を御自身で要約していただきました。)

プロフィール

源 豊宗 氏

1895年福井県武生市に生まれる。京都大学文学部美術史学科卒。京都大学講師、美西学院大学教授、帝塚山学院大学教授を歴任。元文化財保護審議会専門委員。編著書は、「日本美術の流れ」志求社、「大徳寺」朝日新聞社、「日本美術史年表」巣右宝刊行会など。

